HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	PericlesにおけるChorus, Gowerの働き
Author(s)	宮下, 弥生
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 110, 113-128
Issue Date	2003-07-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34051
Type	bulletin (article)
File Information	110_PL113-128.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 110 (2003)

Pericles における Chorus, Gower の働き

宮 下 弥 生

1．問題の所在

Shakespeare の劇作品には Chorus が登場するものがいくつか認められるが，*Pericles* に登場する Chorus 役，Gower は他の作品の Chorus たちに比べて，登場する回数，与えられている行数のみならず，その果たす働きとしても重要な意義を担っていることがよく指摘されている。さて，この Chorus, Gower が他の Chorus たちと大きく異なる点は，Shakespeare が *Pericles* の主な材源として 14 世紀の詩人 John Gower の *Confessio Amantis* の最後，第 8 巻の大部分を占める 'Apollonius of Tyre' の物語を用い，さらに詩人 Gower が死の灰の中から蘇り，自分の物語をするという設定になっている点である。これはこの劇のテーマのひとつ「死と再生」を表現するものだという考え方がある一方で，Chorus, Gower を dramatic device という側面から捉えてみると，テーマ的意義を越えるものがあることがわかる。Northrop Frye は，Gower はこれが劇であることを私たちに思い出させ，劇の枠組みを取り払い，そのなかに導き入れる働きをしていると述べている[1]。Frye はさらに続けて，Gower は死から呼び起こされた老人で，文学の伝統の権威を代表するものであり，Gower 自身さらに古い材源によっており，私たちを可能な限り無批判な状態にすると述べている。Frye が Gower の働きをこのように考える背後には，'imaginative faith' の概念があり，眼前で起こっている出来事を，想像力を働かせて信仰するかのごとく無批判に取り込むべきであると

いう考えに依っている[2]。Felperin もこの流れに沿い，荒唐無稽なお話と嘲笑してしまうのではなく，これから起こる不可能な出来事を聴衆に受け入れさせるよう計算されたものであると説明している[3]。また Palfrey の見解は Gower による chorus を稚拙で洗練されていないと非難する従来の見方からはずれるものではなく，Gower のたどたどしい説明の言葉についても，また各場をつなぎ合わせる働きについても時代遅れの感があり，この劇の持つ時間と場所を自由に動き回る動きにはそぐわないと批判的である[4]。

このように Chorus，Gower は一見ぎこちなく無理な設定のように思えるが，実は逆に積極的な効果を狙って用いられていると考えることができる。本論では，Gower が架空の登場人物でありながらも死の灰から蘇った詩人であるという設定になっていることの意義を考察し，Shakespeare が John Gower 自身や *Confessio Amantis* の内容からどのような Chorus，Gower を作り上げたのか，また chorus 役をこのような人物に設定したことで，本来 chorus というものが果たすべき観客の案内役という働きにどのような影響があるのかを論じてみたい。

2．Chorus の役割

Chorus はその起源を紀元前 5 世紀の Aeschylus や Sophocles 等のギリシャ悲劇の合唱隊コロスにまで遡ることができる。ギリシャ悲劇において plot の展開にコロスはなくてはならない存在であった。まず劇中人物を演じる俳優が登場し，プロロゴスを述べるが，このプロロゴスのない作品もあった。その後パロドスで 12 人もしくは 15 人から成るコロスが歌を歌いながら入場し，劇世界へ観客を導入する働きをする。その後，俳優が演ずるエペイソディオンとコロスが歌い踊るスタシモンが交互に置かれている。エペイソディオンではコロスの長が劇中の登場人物と対話を交わすこともあり，一見劇中人物のように振る舞うこともあるが，やはり劇中の事件に直接働きかけることはない。このようにコロスは劇中人物たちとは存在のレベルが違っており，その観点から劇中世界の解説をする役割をしている。エリザベス朝の

劇作家たちはこのコロスの伝統を引き継いで用いているが，chorus と言っても一人の人物にしてしまった点，完全に劇中世界の外に存在する人物にしたという点がギリシャ悲劇のコロスとは違っている。

そして Shakespeare 劇では，劇中の人物が最後に Epilogue を述べる *The Tempest, Troilus and Cressida* のような作品もあるが，これとは別に劇中人物とは存在レベルの違う Chorus が登場する作品がいくつかある。*Romeo and Juliet* では劇の冒頭と第 2 幕の最初に Chorus が登場し，sonnet 形式で冒頭では劇全体の内容説明をし，第 2 幕ではその途中の経過説明をしている。*Troilus and Cressida* では Prologue で甲冑を身につけた Chorus が劇を始めるにあたって観客に必要な予備知識を与えている。また *The Winter's Tale* では劇の途中，第 4 幕冒頭で Chorus，Time が登場し，ここで 16 年の月日を飛び越えることと，その間に起こった出来事の説明をしている。*2 Henry IV* の Prologue では一面に舌の模様を描いた服を着た Rumour が Chorus 役を務めているが，この場合はその情報を本当に信じていいのか観客を煙に巻きつつ第一部との橋渡しをしている。*Henry V* の Chorus は広大な土地での長期に渡る歴史を扱うため，案内役としてさらに大きな働きを与えられている。そして Prologue，Epilogue のみならず，各幕の冒頭に登場し，その間に起こった出来事を説明し，場所と時間の移り変わりを想像力で補うように言い，観客にこれから起こる出来事を受け入れて判断するようにお願いしている。

このように *2 Henry IV* の Chorus については議論の余地があるものの，以上の Chorus たちの本質的な役割は，劇中世界の外に存在し，劇中世界で起こることの説明や解説をし，観客を導くことであると考えられる。この Chorus は他の登場人物たちとは存在のレベルが異なるものの劇中の架空の登場人物のひとりであると考えるべきであるが，特定の人格をもっていないために観客の案内役としての Chorus の役割を純粋にこなすことができ，またそうしているのだと考えられる。

3．ロマンス劇にふさわしい Chorus 役，Gower

これに対して，*Pericles* の Chorus 役，Gower がこの Chorus たちと本質的に違っているのは，実在した中世の詩人が死の灰から蘇ったという設定になっており，その為に一個の人格を担った人物が Chorus 役を務めているという点である。では *Pericles* において Shakespeare は *Confessio Amantis* をどのように用い，それに対してどのような Gower 像を作り上げ，Chorus，Gower にどのような性質を付与したのであろうか。

Chorus，Gower はまず Prologue に登場し，前口上を述べる。

GOWER　To sing a song that old was sung,
From ashes, ancient Gower is come,
Assuming man's infirmities,
To glad your ear and please your eyes.
It hath been sung at festivals,
On ember-eves and holy days,
And lords and ladies in their lives
Have read it for restoratives.
The purchase is to make men glorious:
Et bonum quo antiquius eo melius.
If you, born in those latter times
When wit's more ripe, accept my rhymes,
And that to hear an old man sing
May to your wishes pleasure bring,
I life would wish, and that I might
Waste it for you, like taper-light.

(*Pericles*, Prologue, 1-16.)[5]

ここに見られる擬古文の文体，*Confessio Amantis* と同じ iambic tetrameter の rhyming couplet，ラテン語の使用，10 行目に見られる教訓などの Gower 的な特徴は，実在の詩人 John Gower を受けて Shakespeare とその共作者が新たに作り上げたものである。

一方 *Confessio Amantis* は聴罪師 Confessioner である Genius が恋する男 Aman に道徳的説話をして愛について教訓を与えるというもので，その第 8 巻では〝lechery〟を扱い，その大部分を占める，'Apollonius of Tyre' の話が *Pericles* の主な材源となっている。以下の引用は Apollonius の話を終えたあとの Genius の教訓の部分である。

Lo, what it is to be wel grounded:
For he hath ferst his love founded
Honesteliche as forto wedde,
Honesteliche his love he spedde
And hadde children with his wif,
And as him liste he ladde his lif;
And *in ensample his lif was write*,
That alle lovers myhten wite
How ate laste it schal be sene
Of love what thei wolden mene.
For se now on that other side,
Antiochus with al his Pride,
Which *sette his love unkindely*,
His ende he hadde al sodeinly,
Set ayein kinde upon *vengance*,
And *for his lust hath his penance*.
(Gower, *Confessio Amantis*, Book VIII, 1993-2008. Emphasis added.)[6]

ここでは，正しい愛を貫いた Apollonius に対して Antiochus とその娘の近

親相姦の愛欲を戒めるためのものであり，その罪のためにAntiochusは天の懲罰を受けることになったことが強調されている。

これに対して，*Pericles*では同じような話の筋を保ちつつもChorus, Gowerは全く違った姿勢を見せている。Prologueの4行目，14行目でGowerは自分が死の灰から蘇ったのは観客の皆の耳と目を喜ばせるためであり，皆に喜びをもたらすためであると述べている。また自分が歌おうとしている歌はお祭りの時に歌われたお楽しみの歌であり，貴族，貴婦人たちが〝restoratives〟として読み，その効能は人々を〝glorious〟にすることだと述べている。この〝restoratives〟という語は「元気を取り戻すための食べ物，薬」という意味であり，〝glorious〟は*OED*やSchmidtにあるような栄誉を求めるような気持ちというよりはむしろ，DelVecchio等が説明しているような，〝restoratives〟を服用した結果得られる健康な状態であり，それが「気高い心」であると考えてよいであろう[7]。このようにShakespeareは実在の詩人Gowerらしい特徴を保ち，時には道徳的教訓を差しはさみはするものの，自分の物語が人々に喜びをもたらすものであるというロマンス劇にふさわしい目的をかかげる人物としてChorus, Gowerを作り上げたのである。

さらにShakespeareの他のChorusたちが自分の説明が必要なおりに登場し，むしろ劇中世界の方により重きが置かれているのに対し，Chorus, Gowerは自分が劇中世界を支配するものであることを様々な手段を用いて強調している。まず劇冒頭で皆に喜びをもたらすという自分の存在意義を認めてくれたらと条件を示すや，劇の最初の場であるAntiochを‘this’という語で限定することで自分が劇中世界を掌握するものであることを示している。

This Antioch, then, Antiochus the Great
Built up this city for his chiefest seat,
The fairest in all Syria.
(*Pericles*, Prologue, 17-19.)

さらに Chorus, Gower は dumb show を呈示することで同じく劇中世界を支配する点を示すばかりか，それが作り物にすぎないことも強調している。Gower は自分の Chorus 部分で三度，出来事間の plot をうめるべく劇中人物たちに黙劇を演じさせている。Dieter Mehl によれば黙劇はエリザベス朝演劇にはよく用いられる技法でありながら，Shakespeare 劇には *Hamlet* 等 6 例があるばかりで，この *Pericles* においては黙劇の部分と劇の他の部分がもつおとぎ話のような雰囲気とが調和していると述べている[8]。そしてさらに Shakespeare は本来の黙劇の primitive な性質を批判的に用いて逆に新しい効果を狙っている。つまり Gower が自分で筋を説明できるような場合にも敢えてこのような稚拙な黙劇を操ってみせるもう一つの大きな理由は，劇中世界が虚構であることを積極的に示すためなのである。

以下の引用にも，Gower が，ロマンス劇の持つおとぎ話のような雰囲気を表現し，かつ劇中世界を掌握することを示すことでその虚構性を同時に示していることがうかがえる。

GOWER　Thus time we waste, and long leagues make short,
Sail seas in *cockles*, have and wish but for't,
Making to take your imagination
From bourn to bourn, region to region.
. . . . . .
Well-sailing ships, and bounteous winds have brought
This king to Tarsus — think this pilot thought —
So, with his steerage, shall your thoughts groan
To fetch his daughter home, who first is gone.
Like *motes* and *shadows* see them move awhile;
Your ears unto your eyes I'll reconcile.
(*Pericles*, 4.4.1-22. Emphasis added.)

まず 1 行目で Chorus, Gower は劇中世界の時間も距離も自分の裁量で自由

に操ることのできる立場にあることを示している。また 'cockle' という語の使用はこの劇のおとぎ話の雰囲気にふさわしく，劇中の船は 'cockle' であり，人間は 'mote', 'shadow' に過ぎない。このような比喩を用いることで Gower は劇中世界を矮小化してみせているのである。

中世の詩人が死の灰から蘇ること自体が非現実的なことであり，Gower 自身が虚構性を具現する人物となっているのであるが，以上見てきたように，Shakespeare は Chorus，Gower を実在の詩人 Gower の痕跡を保ちつつも，皆に喜びを与えるという目的を掲げ，おとぎ話のような雰囲気を自身も持ちつつ，また自分でもその雰囲気を表現して見せるロマンス劇にふさわしい Chorus 役に作り上げた。さらにこの Chorus，Gower は劇中世界を掌握するものとして劇世界の虚構性を積極的に呈示していることを dumb show，劇中世界を矮小化する比喩表現という点から考察した。

4．劇内容に対するアンチテーゼとしての Chorus，Gower

では次に Shakespeare の他の Chorus たちが観客を導く案内役を純粋にこなしているのに対して，chorus 役をこのように限定された人格を持つ人物に設定するということがその働きにどのような影響を及ぼすのか，特に演じられる劇内容に対して Chorus，Gower が観客にどのような説明や価値判断を与え，それが劇内容の受容にどう機能するのかという問題について考えてみたい。

以下は第 2 幕の冒頭で，第 1 幕で展開してきたことを受けての Chorus，Gower の科白である。

GOWER　Here have you seen a mighty king
　　His child, iwis, to incest bring,
　　A better prince and benign lord
　　That will prove awful both in deed and word.
　　. . . . . .

The good in conversation,
To whom I give my benison,
Is still at Tarsus, where each man
Thinks all is *writ* he spoken can;
And to remember what he does
Build his statue to make him *glorious*;
(*Pericles*, 2.0.1-14. Emphasis added.)

この最初の4行は *Confessio Amantis* に見られる道徳的教訓，つまり娘を近親相姦に引き込んだ王を非難し，それに対して Apollonius を讃えるという姿勢を引き継ぐものとなっている。ここではさらに Chorus, Gower は「私が祝福を与える，行いのよき人」と Pericles を讃える姿勢を強めていく。また 12 行目では Pericles の言葉は〝writ〟とされている。この〝writ〟という語は本来「書き記されたもの」という意味であるが，ここでは Malone の解釈を受けて Hoeniger も DelVecchio, Hammond も〝Holy Writ, gospel truth〟と注釈している[9]。さらに，14 行目に見られる〝glorious〟という語の使用にも，Pericles を神的な存在にまで高めようとする Chorus, Gower の姿勢がうかがえる。

しかし，第1幕の内容や Pericles の行動を考えると，この Chorus, Gower の言葉をそのまま受け取ることはできない。ここでこの作品のテーマのひとつでもあり，ロマンス劇の共通テーマともなっている，misgovernment の問題について考える必要がある。第1幕では娘を近親相姦に引きずり込んだ暴君の Antiochus が非難されているばかりではなく，Pericles が王としての資質に欠けることが材源の *Confessio Amantis* よりも拡大されている。世継ぎを得るために Antioch に出向きながら，謎解きの失敗は死であるという求婚の条件を知りながらも死を〝no hazard〟と言い切ることには，自分の死は王国が世継ぎを失うことだという王としての認識が欠けている（1.1.5)。また Antiochus の娘は Hesperides に喩えられ，その守る黄金のりんごは禁断の果実である。

ANTIOCHUS　Before thee stands this fair Hesperides,
With golden fruit, but dangerous to be touched;
For death like dragons here affright thee hard.
(*Pericles*, 1.1.28-30.)

このような娘に求婚すること自体が誤りなのであり，それが見方によっては罪とも言えることを第1幕第2場でPericles自身振り返って〝offence〟という語を用いて表現している(1.2.91)[10]。さらにDelVecchio，Hammondも主張するように自国がAntiochusに脅かされていることを知りつつ，Hellicanusに統治を任せてTarsusに逃れることは，緊急時における国王の不在・治世の責任放棄を示すものである[11]。この場面のHellicanusの思慮深さと行動は逆にPericlesの王としての資格のなさをironicalに映し出す対比物となっている。そしてこのことは次のPericlesの科白で，王と家臣の立場が逆転してしまっていることに象徴的に表現されている。

PERICLES　Fit counsellor and servant for a prince,
Who by thy wisdom makes a prince thy servant,
What wouldst thou have me do?
(*Pericles*, 1.2.62-64.)

また，1幕4場ではTarsusにおける飢饉の様子が描かれているが，ここでもその統治者であるCleonのmisgovernmentが問題になる。Cleonは飢饉の様子を長々と熱く語りながらも民を助けるために自ら行動を起こすことはない。しかしさらに重要なのは，飢饉に見舞われる前のTarsusの状況である。

CLEON　This Tarsus o'er which I have the government,
A city on whom plenty held full hand——
For riches strewed herself even in her streets——

Whose towers bore heads so high they kissed the clouds,
And strangers ne'er beheld but wondered at,
Whose men and dames so jetted and adorned,
Like one another's glass to trim them by;
Their tables were stored full to glad the sight,
And not so much to feed on as delight;
All poverty was scorned, and pride so great,
The name of help grew odious to repeat.

DIONIZA　O 'tis too true.

(*Pericles*, 1.4.22-33.)

ここでは富が街路にばらまかれ，食べるためよりは目を喜ばすためにテーブルが食べ物で飾られるという常道を逸した贅沢ぶりが強調されている。さらに塔が雲にキスするほどに高く頭をもたげる様は，Hoeniger も主張する通り，バベルの塔を思い起こさせるものであり，人間の神への傲慢な挑戦を暗示するものとなっている[12]。しかも Cleon はこの贅沢の持つ悪に気が付かないばかりか，むしろ肯定さえしており，その悪政ぶりがさらに強調され，またそれに対する Dionyza の〝O 'tis too true.〟という相づちはさらに ironical にその認識のなさを露呈している。

しかしこの場面の直後，第 2 幕の冒頭の Gower の言葉には Cleon の悪政ぶりに対する批判はみじんもなく，Pericles が Tarsus の国に行った慈善行為のみが強調されている。また実際は Pericles 自身も自国を離れなければならない理由があり，たとえ Tarsus に食料をもたらして民衆を救ったとしても，自らも滞在させてもらうことで生命の保証を得ているという事実を考えると，単にお互いの利害が一致したに過ぎず，Gower の Pericles を讃える言葉は行き過ぎであることがわかる。このように，第 1 幕の内容を受けての Chorus であるはずが，これまで展開されてきた内容と Gower の説明は食い違いを見せており，観客を正しい方向に導くはずの劇の案内役としての Chorus の働きに疑問が生じてくる。

このような劇内容と案内役であるChorus，Gowerの説明のずれはEpilogueに至って決定的なものとなる。

GOWER　In Antiochus and his daughter you have heard
Of monstrous lust, the due and just reward;
In Pericles, his queen and daughter seen,
Although assailed with fortune fierce and keen,
Virtue preserved from fell destruction's blast,
Led on by heaven, and crowned with joy at last.
In Hellicanus may you well descry
A figure of truth, of faith, of loyalty;
In reverend Cerimon there well appears
The worth that learned charity aye wears.
For wicked Cleon and his wife, when fame
Had spread their cursed deed, and honoured name
Of Pericles to rage the city turn,
That him and his they in his palace burn;
The gods for murder seemed so content
To punish, although not done, but meant.
So on your patience evermore attending,
New joy wait on you: here our play has ending.
(*Pericles*, Epilogue, 1-18.)

Epilogueは当然この数時間に渡って演じてきた劇の総括の役割を担うべきものであり，G. Wilson Knightはここに欠けているものは何もなく，Gowerの語りは劇全体にunityを与えるものだと肯定的な姿勢を見せている[13]。しかしHoenigerは最後のsummaryにHellicanusのようなminor characterまで言及されており，またCleonやDionizaの運命になど興味はないと，このEpilogueに疑問を呈している[14]。しかも実際にはHellicanusよりもさら

に minor character である Cerimon にさえ言及されその美徳が讃えられている。さらに劇の締めくくりに述べられる Cleon とその妻に対する道徳的教訓については，この劇が「殺人は実際になされなくても，意図しただけで罰せられるのだ」という教訓を引き出すために演じられてきたものでないことは言うまでもない。先程論じたように第1幕で展開された劇内容と第2幕冒頭の Chorus, Gower の説明に食い違いが生じていたように，ここでも同様の食い違いがみられることがわかる。

この劇を通して Gower は劇の presenter としての役割を担い，出来事の合間をぬって登場しその間に起こった出来事を知らせ，一見 chorus としての役割をしっかりと果たしているかの印象を与えているが，その劇内容に対する説明や価値判断ははっきりと劇内容と対立するものとなっている。つまり Gower の与える価値判断はテーゼとしての劇内容に対して，アンチテーゼとして働き，観客にこの劇の持つ意味を今一度振り返って考え直すことを促す役割を果たしていると考えられる。そしてそれは Pericles と Marina がそれぞれ別個に数々の苦難を乗り越えて出会う recognition scene が与えてくれる感動であると言えよう。

5．ロマンス劇の与える喜び――〝restoratives〟

さてこの5幕1場では，この劇が虚構であることを積極的に示しながらもその中に真実と喜びがあるというロマンス劇の本質を，登場人物の科白上にメタ的に凝縮して明示している。Marina が Pericles に聞かせる自分の身の上話はこれまで劇の中で展開されてきたものであり，奇想天外な内容である。そこで Marina は自分の話をしても嘘のようだと思われると言う（〝If I should tell my history, it would seem / Like lies disdained in the reporting.〟(ll.114-15)。だが Pericles は Marina を〝A palace for the crowned truth to dwell in〟と表現し (l.118)，不可能なことでも信じようと言う (l.120)。しかし途中信じられなくなりそうな Pericles に Marina は patience を要求する。Pericles は Marina の話を〝the rarest dream〟だと

言うが(1.158)，それでも最後には Marina の話を受け入れ，その時の溢れんばかりの喜びを次のように表現している。

PERICLES　O Hellicanus, strike me honoured sir,
Give me a gash, put me to present pain,
Lest this great sea of joys rushing upon me
O'erbear the shores of my mortality,
And drown me with their sweetness:
(*Pericles*, 5.1.185-189.)

一方観客にとって Marina と Pericles の対話の中で新情報は何一つなく，観客は登場人物たちよりも知識的に優位な立場で見ることができる。しかしこの場では観客の視点は自分の身の上話を語る Marina の視点にではなく Pericles に当てられ，Pericles が目の前にいる娘が自分の娘であることを受け入れていく過程を観客も共にたどるように仕組まれている。観客も Pericles の視点からみて，最初に妻そっくりの Marina に涙するところから，最後に死んだはずの娘が生きて目の前にいる喜びを共にたどることになるのである。そしてこの感動と喜びが Chorus, Gower が Prologue で観客に約束した〝restoratives〟であると言えよう。

6．結論

以上，まず Shakespeare は Chorus, Gower が実在の詩人 Gower の痕跡を保ちつつも，雰囲気的にもまた喜びを与えるという目的からみてもロマンス劇にふさわしい架空の登場人物として Chorus 役，Gower を作り上げ，さらにこの Gower は劇中世界を掌握するものとして劇世界の虚構性を積極的に呈示していることを見てきた。Shakespeare の他の Chorus たちが，特定の人格を持たないために劇中世界で起こることの説明や解説をし，観客を導くという Chorus 本来の役割を純粋に果たしているのに対し，Chorus, Gower は

一見正しく観客を導くような姿勢を見せながらも，その与える価値判断は劇内容と対立するものであり，劇内容に対するアンチテーゼとしての働きを担っている。後期ロマンス劇は，虚構でありながら表向きは realistic であることを主張する劇の前提をくつがえし，その虚構性を前面に打ち出すものである。このように劇は虚構であるという radical な姿勢を取りつつ，それでもその中に伝える真実があるのだということを，Chorus，Gower は劇内容に対するアンチテーゼという形で暗示するという働きを担っていると考えられる。そして，Chorus，Gower の価値判断がアンチテーゼとなり得るのも，Gower が架空の登場人物であるがために，その言葉が相対的なものとなるからなのである。

註

*本論は日本英文学会第 74 回全国大会（2002 年 5 月 26 日，於北星学園大学）における口頭発表に，加筆修正を施したものである。

[1] Northrop Frye, A Natural Perspective: The Development of Shakespearean Comedy and Romance (New York: Columbia UP, 1965) 31-32.

[2] Frye 19.

[3] Howard Felperin, *Shakespearean Romance* (Princeton: Princeton UP, 1972) 147.

[4] Simon Palfrey, *Late Shakespeare: A New World of Words* (Oxford: Oxford UP, 1997) 41.

[5] *Pericles* からの引用はすべて William Shakespeare, *Pericles, Prince of Tyre*, ed. Doreen DelVecchio and Antony Hammond, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge UP, 1998)による。

[6] John Gower, *The English Works of John Gower*, ed. G. C. Macaulay, EETS, ES, 81-82 (Oxford: EETS, 1900-01).

[7] Delvecchio and Hammond 85.

[8] Dieter Mehl, *The Elizabethan Dumb Show: The History of a Dramatic Convention* (London: Methuen, 1965) 159.

[9] William Shakespeare, *Pericles*, ed. F. D. Hoeniger, The Arden Edition of the Works of William Shakespeare (London: Methuen, 1963) 38. DelVecchio and Hammond 107.

[10] G. Wilson Knight, *The Crown of Life: Essays in Interpretation of Shakespeare's*

Final Plays (London: Methuen, 1948) 38. Knight は謎解きの失敗が死を意味するばかりか，謎を解くことは Antiochus の秘密を暴くことであり，この度の冒険は罪と死に飛び込むことであると述べている。さらに Pericles は積極的に罪を犯したわけではないが，嫌悪と危険を伴う悪に陥ることであると説明している。

[11] DelVecchio and Hammond 67.

[12] Hoeniger 32.

[13] Knight 75.

[14] F. D. Hoeniger, "Gower and Shakespeare in *Pericles*" in *Shakespeare Quarterly* 33.4 (1982), 467.